

集団的懲罰による協調関係の発展について

内田智士（倫理文化研究センター研究員）

はじめに

人は、何か悪いことをした他人に罰を与える。それを、当たり前のように行っている。例えば、自分の小学生になる子供が、他の子供からおもちゃを取り上げて返さない場合、多くの親は自分の子供を叱るだろう。また子供が宿題をせずに学校に行った場合、学校の先生は子供を叱るかもしれない。この叱るという行為は当然、子供にストレスをかけることになるわけであるから、罰の一形態である。

社会には、もっとあからさまな罰も存在する。例えば、他人に重大な危害を加えた場合は逮捕され、刑務所に入れられることになる。また車を運転する場合に、交通法規を無視した振る舞いをすると罰金を払わされることになる。これらの社会における懲罰は、それを専門とする者により実行されるわけであるが、そのシステム自体は我々の支払う税金により賄われ維持されている。その意味ではこの場合も、我々自身が懲罰に参加しているとも言える。

このように懲罰行為は日常あまねく見られるわけであるが、実は人がなぜ懲罰を行うのかについて、科学的にはあまりよく分かっていない。懲罰を行う理由の説明が、未だ十分な形でなされていないのである。その点についての科学分野における議論を紹介するのが、本稿の目的の1つである。

懲罰を行うには、懲罰者は時間や労力・金銭などのコストを支払わなければならない。例えば子供を叱るにも、叱るほうは体力と精神力、さらには時間を消耗する。社会法規から逸脱した者を罰する場合も、そこには少なくない労働力と金銭が投入されている。その意味で一番楽なのは、悪いことをしている個人には干渉せず、放っておくことのはずである。それにもかかわらず、そのようなコストのかかる懲罰を行う（行いたくなる・行わずにはいられない）のはなぜだろうか。

最近では脳科学の分野で、NIRS（近赤外光）脳機能計測装置やfMRI（機能的核磁気共鳴画像）装置を用いて、懲罰的行為を行っている最中の脳の特定部位（前頭葉や側頭葉など）の血流量が調べられ、また懲罰的行為を行いやすい人とそうでない人とで、脳の特定部位の体積がどのように違うのかの比較がなされている。それにより、例えば懲罰と理性・感情・衝動性との関連が指摘されつつある。このように脳の活動と懲罰行為との関連に関するデータが蓄積されているものの、ではそれがなぜそのようなになっているのかについての解明はなされていない。

なぜ人は懲罰を行うのかという問いに対しては、心理学や社会学など様々な分野からのアプローチが可能であろう。本稿では、特に人の協調関係形成との関連で、人類の歴史における懲罰システムの出現と発展について、特に利得という観点でゲーム理論から示唆されることについて述べてみたい。